鶴見俊輔、小田実が語る「9・11と9条」その②

「9・11」の事態からみた日本国憲法の重大な意義

――「殺し、殺され、焼き、焼かれ」の繰り返しの歴史を断ち切る仕事――

小田　実

前号に掲載した鶴見俊輔さんの講演記録に続き、今号では、9月11日に大阪で開催された「市民の意見30・関西」（代表＝小田実さん）主催の「鶴見俊輔さん、小田実さん、二人が語る『9・11と9条』」という集会での小田実さんの話をご紹介します。

◆「9・11」と日本の特攻隊◆

私もやはり個人的な話から始めます。

五年前の9月11日、日本時間では12日の夜、居間のTVのスイッチを入れたら、見覚えのあるニューヨークの世界貿易センター・ビルの一つに飛行機がぶち当たる画面だった。その時直感したのは、あ、これは特攻隊だ、ということだった。日本人のTV記者は、いったいあれは何だと騒いでましたが、私には戦争中の体験があったので、それが分かった。私は戦争の末期、大阪大空襲の悲惨な経験をし、玉砕や特攻隊攻撃などに大きな関心を持ってきた。戦争が続けば私だって特攻に「志願」させられたかもしれない。

特攻隊は小泉純一郎が思っているような「祖国愛」だの「賛美」の対象などでは決してなく、悲惨きわまるものであったことを、私は知っている。

やがて新聞社から電話が入って、この事件について書いてくれと言う。それは『朝日』の13日朝刊に「日本の市民として」というタイトルで載った。その一部を読みながら、話を続けます。

……私が書くのは、事件の真相はこうだ、というたぐいのことではない。ひとりの日本の市民として「事件」をどう考えるか、だ。……（注1）

「日本の」とつけたのには意味がある。これは過去の日本の歴史の再現だと思ったからだ。アジアの人びとを殺し、焼き、奪うことをやり、その結果として、日本人も殺され、焼かれ、奪われるという悲惨な体験もした。若い人びとの中には、日本の加害責任だけをいう人もいるが、同時に被害者にもなって、惨憺たる経験をしたことはあまり言わない。

先ほど鶴見さんが話した『NYタイムズ』の大阪空襲の写真を私は自分の書斎に掛けてある。写真は都市の上をただ黒煙がおおっているだけだが、私はその下にいて、火炎地獄を体験していた。45年6月14日のことで、新聞は17日付だ。

私は似たような光景を、報道写真やニュース映画でそれまでに見ていた。日本軍の中国・重慶などに対する爆撃だ。私はそれを何気なしに見ていた。痛恨の限りだが、その下で、中国の民衆がいかに悲惨な目にあっていたかに、思いが及ばなかったのだ。そのことを考え抜くという意味もあって、私は『NYタイムズ』の写真を掲げているのです。

もう一つ、「市民」にも意味があった。あの「太平洋戦争」では膨大な死者が出たが、大多数は市民、非戦闘員だった。9・11での死者も大部分が市民だった。つまり、われわれのような人間なのだ。

フガニスタンでタリバンが武装闘争をし、自爆攻撃をかけても、事態が解決できる見通しはない。悪循環が繰り返されるだけだ。そんなやり方ではなく、違う世界のあり方を、違う方法で求めようではないか。そうして持ったのがわれわれの平和憲法で、前文には抑圧と差別のない世界を武力を使わずにつくろうではないかとあり、その具現化として第9条を規定した。9・11は、あらためて、それをわれわれに考えさせた事態だった。今日の集会の意義はそこなのだ。

◆コソボ攻撃とギリシャの反対◆

私は、先の文章の中でこうも書いた。

……私はここで、その日本の市民として、今、日本のなすべきことを考える。それは、軍備と「安保体制」を強化して世界の「テロ」にいっそう強力に対することではない（世界最大最強の軍備をもつアメリカの本拠の地の市民があまた殺されたことは何を意味しているのか）。私はかつてユーゴスラビアへの「北大西洋条約機構（NATO）」軍の空爆が始まったとき、国をあげて「反戦」にとり組んでいたギリシャで、「平和憲法」をもつ日本がどうして同じ努力をしないのかと言われたことがある。……

あの時、コソボ空爆をいち早く支持したのは日本で、ノーと言ったのはNATOの一員のギリシャだった。

ギリシャという国の人は、他人と同じことを言わない。同じことを言うとアホかと思われる。そういうギリシャだが、一つだけ、一致して同じことを言ったときがあり、それがNATOの空爆への反対だった。新聞も、政党も、右左一致して反対だった。バルカン半島の事態解決のためにどれほど武力が行使されたか分からないが、どれも成功しなかった、武力によらぬ解決を求めるべきだという主張だ。

◆日本政府は何をしたのか？◆

続けて私は書いている。

……構造改革を叫ぶ日本の首相は、今、どうしてパレスチナ・イスラエル和平交渉に出かけて、世界の構造改革のために少しでも貢献しようとしないのか。……

これが私の実感です。私が日本の首相だったら、出かけていって、イスラエルとパレスチナの間で、やめろと言って座り込むね。小泉はついこの間も中東へ行った。両国の首脳から、ヨルダンの国王にまで会い、中東和平は大事ですと口だけで言いながら、何もしなかったではないか。　間に立って何とかつなごうとし、オスロ合意をつくったのは、平和憲法など持たないノルウェーだった。日本は何故そういう努力をしなかったのだ。

私はそういうことを書いたことがあった。すると、日本のインテリは困ったもんだね。あんなオスロ合意はインチキだ、というような批判をすぐする。だが、オスロ合意にケチをつける前に、なぜ「東京合意」を日本がやろうとしなかったのかを考えるべきではないのか。

9・11直後、私を別とすると、新聞に載った識者の意見というのは、アメリカの民主主義と自由の擁護を主張するものだった。しばらくすると、今度は、アメリカは間違っている、抑圧されている第三世界の民族の立場に立て、というような勇ましい議論も出てくる。アメリカ帝国主義への弾劾です。反戦集会などでは、そういう議論に拍手喝さいとなる。しかし私はそうは言わない。その前に考えることがあるだろう、それは日本がやったことではないか、ということだ。そこから平和憲法がうまれてきたということ、それを認識して、日本のやるべきことを考えろ、私はそう言う。

◆危うくなったデタントの流れ◆

戦争に正義などないという考えは、第二次大戦後、はじめて市民権を得るようになった。日本国憲法がそれだし、またコスタリカのように軍備を持たない国も出てきた。ドイツでは、基本法の第4条に、「なにびとも武器をとることを強制されない」という項目が入った。つまり良心的兵役拒否の承認だ。ドイツでは

先ほどの文の続きです。……ここで「日本の」と書くのは、日本がかつてアメリカ合州国を「敵」として戦い、「神風」自爆攻撃まで行なった国であるからだ。しかし、日本が、同時にまた、その過去の反省に基づいて、問題解決に武力、暴力を用いないことを原理とした「平和憲法」をもつ国としてあるからだ。……

われわれがやったのは正義の戦争ではなかった。だが、われわれと戦った側にとっても、それは正義の戦争だったのか。

彼らはそうだと言った。不正義の戦争をしている日本やドイツと戦うのだから、正義の戦争なのだと。正義の戦争だと主張する側は勝たねばならない。だが、相手は不正義だから、どんな卑怯で、残虐な手段をとってくるか分からない、とすれば、勝つためにはこちらはそれを上回る方法を取らねばならない、そういう悪循環が起こり、最後は原爆となる。そして犠牲になるのは、いつも市民だ。

◆日本への無差別空襲とルメイ将軍◆

編集部注 ここで小田さんは、日本空爆の指揮官、カーチス・ルメイ将軍についての話をされたが、それは、本誌第90号（05年6月号）の18～19ページにある昨年の昭和女子大講堂での講演で小田さんが述べた内容とほとんど同一なので、割愛します。

◆戦争の「大義名分」とは◆

さっきの文章の中ほどを読んでみます。

……私にとって、「事件」は意外ではなかった。ブッシュ大統領は、これはアメリカに対するテロだと言ったが、実行者がだれであれ、彼らにとってはアメリカを「敵」とした戦争であったにちがいない。「宣戦布告」なき戦争だが、日本の「日中戦争」、アメリカの「ベトナム戦争」も「宣戦布告」なき戦争だった。その戦争のなかで日本は市民を殺し、アメリカは枯れ葉剤をまいた。

現在のイスラエルによる戦車を投入してミサイルをぶち込む対テロ作戦は、パレスチナ側から見れば、まさに「戦争」だろう。実際の関係がどうであれ、この事態が、実行者が今、「イスラム世界」の人間であるといわれている「事件」に、まちがいなく影をおとしている。眼には眼、力には力、テロにはテロの過程は、当然、戦争には戦争、にまで進展する。

アメリカ合州国は、ことにブッシュ政権の出現以来、巨大な軍事力を背景に力のゴリ押しを強行して来た国だ。このアメリカに対して、戦争を行なって、何がわるいか――「事件」の実行者がそう事態をとらえてふしぎはない。

どの戦争も大義名分をかかげる。彼らはこれまでの「西洋」中心の文明のあり方はまちがっていたと断じる。その文明は、「イスラム世界」などの非「西洋」を武力で制圧、支配、収奪した。この世界のあり方を変えよ、彼らの武力に自らも武力で、テロで、いや、戦争を行なってまで。他人事ではない。日本もかつて同じような大義名分をかかげて戦争を行ない、敵味方にわたって市民を殺し、「神風」自爆攻撃まで行なった国だ。しかし、その上で、その過去の経験に基づいて、日本は「平和憲法」をもった。……

日本も大義名分は持っていた。「大東亜共栄圏」の建設だ。もちろん裏があった。共栄圏といいながら、植民地の朝鮮、台湾を手放さず、中国では侵略戦争を続けた。日本国民は、そして「少国民」だった私も、それを見抜けなかった。

大義名分を掲げた戦争ではあったが、戦力が足らず、最後には神風特攻隊、自爆攻撃です。そういう悲しい歴史をわれわれは持っている。その歴史を、私は五年前の9・11に追体験したのです。これはまさに日本の歴史そのものだ。そういう痛切な思いを込めてこの文を私は書いたのです。

◆「9・11」が考えさせる平和憲法◆

自爆攻撃をかけても、われわれは勝てなかった。全体の武力の強いほうが最後には勝つ。

ブッシュ政権がイラクの事態でまったく行き詰まってしまっていることは確かだ。しかし、片方の側でも、たとえばア

で寝ていたら、昼間来ていた米兵が訪ねてきた。彼は、今、基地内の営倉で暴動が起っている、それをマスコミに伝えてほしいと言うんだ。暴動の状況を聞くとずいぶん詳しい。あんたはどういう人だと聞いたら、驚いたことに、自分はその営倉の番兵だというんだ。よく知っているわけだ。営倉の管理と秩序維持に当たる番兵がこっちの運動に暴動の話を伝えに飛んでくるのだから、この軍隊は目茶目茶になってるな、と思えたものだった。

その時、私はその兵隊に、俺は基地の中に入ったことがない、入れてくれと頼んでみた。そしたらOK、連れてってやるというんだね。翌日、どぶろくを公然と作って有名になった前田俊彦さんなど何人かと一緒にタクシーで基地へ行った。

当然、正門には衛兵がいたが、その兵士が交渉したらOKだということになり、タクシーで基地の真ん中まで入っちゃった。聞いたら、あの衛兵は親友だから、というのだ。暴動が起った営倉の前にも行ってみた。焼けた建物の跡があったり、放水用のホースが散らばっていたり、惨憺たるものだった。

正門に戻ったところでMPに止められ、門の外には、われわれを捕まえるために山口県警の車が待っていた。彼らは、基地の中に入れないから、県を通じて基地司令官に連絡し、われわれをMPが拘束して引き渡すように依頼していた。衛兵はその指令を受けていたから、われわれを止めたわけだ。逮捕を覚悟したが、連れてきてくれた米兵が、何とかするから任せろと言って、そのMPと何か話していた。やがてOK、GO!ということで、タクシーに乗ったまま、身柄引き渡しを待っていた県警の車を尻目に走り抜けてしまった。県警の連中は呆然としていたね。(笑い)事情を聞いたら、その衛兵は、案内してくれた米兵のマリファナ友だちだということだった。(笑い)前田さんは、まじめな顔で、いったい米軍の軍紀はどうなっているのかね、あれでいいのかね、とつぶやいていた。(笑い)いいわけはない。だからベトナム戦争は敗北してしまったのだ。あれでは戦えない。そういう挿話を私は岩国の講演会で話してきた。

ところで、このことが教えるものは何か。国家の指導者や軍の司令官がどんな大きな命令を下そうとも、軍の一番下で、虫のように這っている小さな人間が命令をきかなかったら戦争など出来ない、ということだ。実際こういう動きは米軍の中のあちこちに広がり、そしてベトナム戦争は出来なくなってしまった。小さな人間が、ノーと言う。これは非常に大事なことだ。岩国の市民は、投票でノーと宣言した。これからまだどうなるかは分からないが、とても大事なことだと思う。

◆小さな人間を大切にする日本憲法◆

小さな人間が大事だということを、よくふまえてつくられているのが、日本国憲法です。憲法の第24条では、婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として……とあり、第25条では「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」とある。ほかの国の憲法でも、基本的人権の尊重などとは書いてあっても、これほど具体的に国民の権利を規定している条項をもつ憲法は日本のものだけですよ。

この後段はすごい規定ですね。「国は……努めなければならない」と、国の義務を定めているんです。国民の権利と国の義務と区別してはっきり規定している。

こうした市民の権利を全うするには、戦争などしてはならないのだ。戦争になれば、小さな人間が殺され、また殺す側に回される。そして、最後は特攻隊、玉砕になってしまう。だから9条が必要、大事になるんですよ。

◆最近著『玉砕』について◆

青年の半分以上が、その道を選ぶ。軍事的奉仕活動の替わりに、市民的奉仕活動――つまり、老人福祉、介護をしたり、消防車の運転をしたり、といった活動を兵役と同じ年限、二年間やる。

デタント（緊張緩和）の流れが生まれたのもそうした流れの中でだった。お互いが自分たちこそ正義の体現者だ、といっていたのでは、軍備競争が続き、最後には核戦争になる、それを何とか回避しよう、そうしてデタントの動きが出てきた。それがきっかけになって、ベルリンの壁が破れ、ソ連圏の解体となり、南北朝鮮間の話し合いも出てきた。

だが、この流れを断ち切ろうとしているのが、9・11以後のブッシュの動きです。テロとの戦いは正義の戦争だとわめき、小泉首相も一緒になって、テロだ、テロだと言い出す。北朝鮮の脅威などを言い立て、テロへの防御が必要だといいまわり、国民が浮き足立つ。こうして、せっかく広がろうとしていた正義の戦争などないという認識が危うくなってきている。トヨタの奥田社長が会長の日本経団連は、武器生産の緩和、武器輸出の承認を堂々と要求しだしている。核武装を言い出すものも出てきた。これは憂慮すべきことだ。

◆日本を「災害救援国家」に◆

私は、日本を「良心的軍事拒否国家」にしようと提唱している。戦争をする道具はいらない。日本は災害大国なのだから、災害基本法を作り、災害に強い国にする。市民のボランティア活動に任せるのではなく、国家として災害対策と災害救援で世界に貢献する。難民救済に力を尽くし、必要があれば日本に迎え入れる。戦闘機や爆撃機ではなく、難民救済機をたくさん作る。その飛行機には、日の丸をつけたらいい。災害が起きたり、難民が出たら、すぐに日の丸を付けた日本の救援機が飛んでくるというようになったら、それは侵略のシンボルではないものに日の丸のイメージを変えるだろう。こういうことを、市民はもっと積極的に主張すべきだ。

◆地を這う虫は自由な視点をもつ◆

かつて鶴見さんたちと一緒に、ベ平連という反戦運動をやった。以前、そのことについて書いた『朝日新聞』の記事には、「地をはう視点で」とあった。（注2）

確かにそうで、私たちは虫の視点をもって運動した。だが、大事なことは、虫ほど自由なものはないということだ。よく鳥瞰図と虫瞰図が対比される。鳥瞰図は上から見るもので、トルーマンが見た大阪大空襲の写真、ブッシュが見たイラク攻撃の写真がそれだ。われわれの方は地面にいたのだから、虫のほうだ。虫と言うと、すぐ誤解が起って、虫のように小さなことをシコシコやるんだ、というような話になってしまう。そうではない。虫は上を向いて、自由にものを見るのだ。鳥はダメよ。どこに降りようかと考えて下ばかり見てるでしょ。（笑い）虫はそうではない。上には無限の空が広がっており、自由なのだ。私はベ平連の運動は虫の視点をもつ運動だと言った。

◆岩国基地内の反戦米兵◆

今年私は岩国に行った。そこで米軍基地問題の住民投票をやって、反対派が勝ったことはご存知でしょう。その運動に呼ばれて講演に行った。私はそこで、ベ平連の脱走兵援助活動や、米軍基地内での米兵の反戦運動の話などもした。ベトナム反戦運動の中で、ベ平連は、基地内の米兵の反戦運動を支持し、岩国では若者が反戦スナックを作って住み込み、地元の牧師さんらと協力して米兵の活動を援助した。

岩国の海兵隊基地の中には強力な反戦グループが育ち、米軍は手を焼いた。米国議会での報告書にも、日本のベ平連の活動は効果を挙げていると書いてある。

今でも思い出すが、三十八年前の七月四日、岩国で反戦集会を開き、それに出かけた。米兵も参加していた。夜、宿屋

そういう思いから出した本がこの『玉砕』です。（注3）共著者で、私の小説『玉砕』を英訳したアメリカの文学者、ドナルド・キーンはアッツ島の戦闘参加者なんです。私の小説を送ったら、それに感動してぜひ英訳したいと言ってきた。9・11が起るのはその後です。

私はかつて『HIROSHIMA』という小説を書いたことがある。（注4）イギリスのNHKにあたるBBC放送は、毎年8月6日を「ヒロシマの日」として、特集番組を組んでいる。十年前には、この私の『HIROSHIMA』をラジオ・ドラマにして放送した。ところが、昨年、このドラマを作ったイギリスの作家から十年ぶりに連絡があり、今度はこの『玉砕』をドラマにして放送したいといってきた。その台本もこの本には入っている。

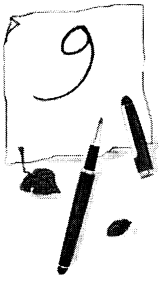
登場人物は日本人と朝鮮人だけだ。放送されるのは英訳だから、日本人役の兵隊が全部英語で話すというドラマだ。これまで欧米のドラマで戦争を描いたものでは、非西欧人は一人の人間としては登場してこない。日本人は「ジャップ」だし、ベトナム人は「グーク」と言われるだけで、名前などない。ドイツ人となると違った。敵でもドイツ人はハンスとかフランツとか名前がついて出てくる。だが、今度のドラマでは、出演者が全部「ナカムラ」などという名を持った一人の人間として登場する。これは初めてのことだ。彼女は何故この作品を取り上げるか、ということも書いている。それは9・11事件があり、その前の戦争の特攻と玉砕があったからだという。つまり、特攻、玉砕は、日本人だけの問題ではなく、全世界が当面し、考え抜かねばならぬ問題と受け止めたからだという。私はその意見に感動し、キーンの文章と合わせて三人の共著にして出したいと思った。それがこの本なのです。

私がこの本の帯に書いた文を紹介して、私の話の終わりにしたいと思う。

……玉砕という人間のもっとも非人間的な行為を媒介として、日、英、米の三人の共著のこの本が、戦争について、国家について、世界について、歴史について、あるいは文学について、そして何より人間について、9・11以後の世界において、今一度あらためて考える手がかりとなることを、私は共著者の一人として期待している。9・11以後の世界においても、玉砕は、特攻とともに、今も、いや今、さらに世界大に広がる新しい形で残り続けている。共著者三人は、その共通認識と憂いをもつ。その共通認識と憂いとともに、この共著を形作った。……（拍手）

（おだ・まこと、作家、「市民の意見30・関西」代表）要約まとめ・文責＝吉川勇一

（編集部注）本文の中の引用文以外の（括弧）内の記述も編集部が適宜つけたもの。

1『朝日新聞』01年9月13日掲載、後、小田実『市民の文（ロゴス）』（岩波書店、2005年、2400円＋税）に所収。

2『朝日新聞』05年3月1日夕刊掲載の「ニッポン人脈記」市民と反戦「参加も自由、発言も自由　べ平連、地をはう視点で」（早野透）。この記事は、朝日文庫『ニッポン人脈記　1　おんながはたらく』に収録されて出版されているが、そこではタイトル名が「ベトナム戦火を生きる人々への思い」と変えられている。（朝日新聞社、2006年、600円＋税）